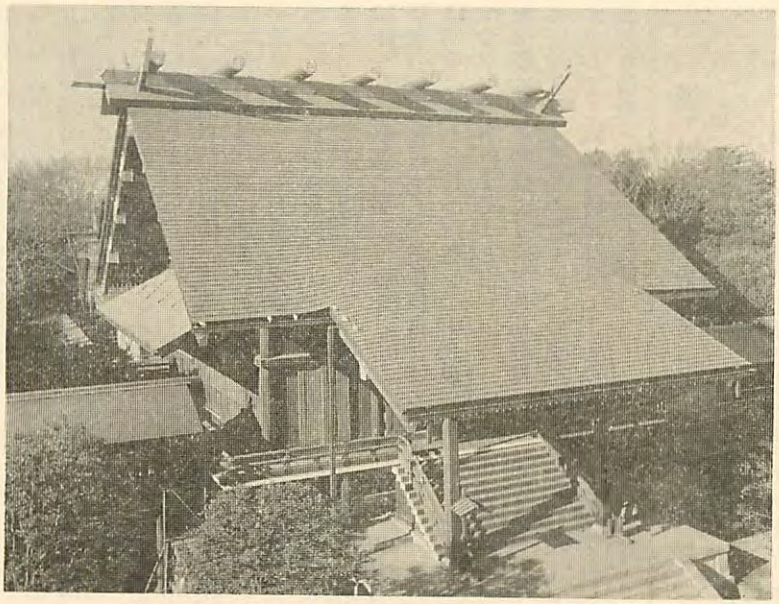


修築成った靖国神社御本殿

マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦没者遺族会）
〒103　東京都中央区
日本橋人形町1—8—2
電話 03—661—8760
振替口座東京0-93487番
編集兼発行人　佐藤宗丕

会員章（バッチ）

平成元年度 慰霊祭総会

山口良二

例年になく暖かく穏やかな日和の二月十二日（日）に平成元年度の慰霊祭・総会が開かれました。

午前九時の受付開始前から、会員の皆様が到着。今年から慰霊祭・総会に出席された方々のお名前を会報に掲載することになりましたので、出席票に氏名を記入していただきました。皆様戸惑いながらも記入を済ませ、一年振りの再会に参集所内のあちこちに話の輪が出来ました。

また、先月厚生省主催のマーシャル・ギルバート諸島現地慰霊の時撮影した写真パネルも掲示され、熱心に見つめられる会員が大ぜいいらっしゃいました。

定刻に御手洗（みたらし）で心身を清め神職の先導で拝殿にすすみ、お祓の後、解体修理の成った御本殿へ。本年度の参加者は全部で一八七名で、本殿はもう会員でいっぱいです。

献饌に続き祭主祝詞奉上。続いて玉串奉奠。会を代表して会長、妻代表の伊藤ますの様、兄代表の宮入貞夫様、妹代表の富田キミ様、子ども代表の池田淑子様、孫代表の神田章様、会友代表の土屋太郎様と一緒に拝礼しました。更に思い思いに黙禱を捧げて今年も無事終了しました。

大修理の成った御本殿は数年ぶりの事ですが、見たところ前と変ったところはありませんが、一つ大きな驚きがありました。それは畳が煖かいことです。例年寒風の吹き抜ける極め付きに寒い御本殿なのですが、今年はそう寒くないのです。異常気象のせいかとも思いましたが、参集所に戻っての皆様の感想はきっと床暖房みたいなものにちがいないということでした。

十時五十分からは参集所において定期総会が開かれました。進行は私の不慣れな司会により、黒川幹事が議長とな↖

目次

慰霊祭・総会……山口　良二……1
会則改正・役員等決定
直会旅行……水野　はな……2
厚生省主催の現地慰霊……4
現地慰霊巡拝に参加して(1)……5
蓮尾　諭吉・佐竹　エス
岩田とし子・鐘ヶ江敬介
近藤　章・浜田　芳枝
秋山　武・秋本　英郎
ブラウン環礁の玉砕（2）
……矢野　雄三……9
現地慰霊巡拝に参加して(2)……13
三上　幸雄・小寺　洋子
鈴木ヨシエ・坂本キヨ子
マーシャル方面遺族会に感謝
……山田　正三……16
お便りの中から……16
加藤　カヨ・村梶　光栄
米田　トシ・小野　リエ
慰霊祭参列者芳名……17
会員名簿訂正（2）……18
寄付者芳名……19
本部だより……20
靖国神社のみたままつり……20
昭和天皇の敬神を
偲ぶ特別展……20

り議事に入りました。

会長から、昭和天皇の崩御をお悼みする旨の挨拶（別掲）のあと、昨年度の会務報告があり、続いて昼間常任幹事から昨年度分の決算報告（別表）、高橋（鎮）監事から監査報告があって満場一致承認しました。

次に会長から、会則中一部改正（改正案は環礁50号16頁に掲載）を提案し原案通り可決。更に会長から本年度の会務計画と予算案（別表）が提案され異議なく可決しました。続いて任期満了に伴う役員改選となり、会長と二人の監事の再任を決定し、常任幹事と幹事は別項の通り会長が指名し、総会議事はすべて無事終了しました。

総会後に昨年本会より靖国神社遊就館へ寄贈された遺品の数々が、特別に展示されましたので皆で拝観し、そのまま流れ解散となりました。

謹んで先帝陛下の崩御を御悼み申し上げます

全国民の願いも空しく、先帝陛下におかせられましては一月七日宝算八十九歳（数へ）を以て崩御遊ばされました。

陛下は激動の昭和の時代に際会され、建国以来の国難に御一身を以て立向われて万世の為に大平の基を開かれました。陛下は常に国家の安寧と国民の幸福を祈念され、殊に戦歿者とその遺族に対しては温いお心遣いをされましたのは度々のお言葉や御製に拝される所であります。

昨年八月十五日の全国戦没者追悼式には、御静養中の那須からヘリコプターで御帰京され、これが御在位六十余年の最後の公式行事となりましたが、私どもにとって胸の痛む思いがいたします。

茲に、陛下の御遺徳を偲び、会員ともども謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

（会長の挨拶から）

会則改正

本年二月十二日の総会で、会則の一部が次のように改正されました。

一、第七条中「（　）」の中の「および給与」を削除します。

二、第十条第二項を削除します。

三、第十一条を次の通り改めます。

「第十一条（会費）会員及び会友は、会費年額二千円を毎年定期総会の日迄に、新入会員は入会の時、その年度分を納入して頂きます。」

四、第十二条中「維持会費」を削除します。

五、第十三条を左の通り改めます。

「第十三条（会計年度）この会の会計年度は、毎年十二月一日より翌年十一月三十日迄とします。」

六、各条章中の「および」を「及び」と改めます。

七、附則

この改正は平成元年二月十二日から施行します。

本年度役員等決定

本年度の役員等が、総会及び役員会の決定により夫々次の通り選任又は委嘱されました。

名誉会長　浮田信家
顧問　栗林徳五郎
相談役　大給湛子
会長　佐藤宗丕
常任幹事　秋本英郎
同　佐竹エス
同　昼間楽平
幹事　荒木常子
同　石谷典夫
同　黒川誠
同　高林芳夫
同　滝知道
同　山口良二
監事　柴崎晃
同　高橋鎮夫
篤志会員　石井清
同　土屋太郎
同　徳原徳子
同　長谷川栄次
同　長谷川敏
同　浜松恒雄
同　本埠和昭
同　松平永芳
同　村瀬松雄
同　森山喜久雄
篤志会員　山村要
同　横溝幸四郎
☆広報委員　佐藤宗丕・秋本英郎・佐竹エス・昼間楽平・荒木常子・石谷典夫・滝知道
☆直会委員　佐竹エス・荒木常子・高林芳夫

訃報

篤志会員西村祐造様（元陸軍少佐）は長らく厚生省援護局業務第一課長として遺族援護の職にありましたが、本年三月五日七十八歳を以て逝去されました。

謹んで御冥福をお祈りいたします。

直会旅行

水野はな

厳粛な昇殿参拝、和やかな総会、そして感激の遊就館拝観を終へて、第二十回の直会旅行となりました。

靖国会館で中食をいただいてバスに乗りこみ、熱海に向いました。バスの中は久しぶりの再会に話が弾み、道路状態も快調、四時今宵のお宿アタミ観光ホテルに着きました。各自部屋に入り、一休みしてから、大きくて綺麗な風呂にゆっくり浸ったあと、秋本常任幹事さんが写してこられた現地のビデオを見せて戴きました。

これは、先月厚生省主催の「マーシャル、ギルバート方面現地慰霊団」に

参加された時のものだそうです。

以前に行ったことのある方々もいらっしゃいましたので、「あそこは、こうなっているわ」「アゝそこは同じね」とテープを止めたり戻したり、感激と興奮の四十分でしたので、時間が足りない思いでした。

夕食は、会長さんの御挨拶のあと、突然に私がカンパイの音頭を取ることになり、皆様の御健康と益々の御発展をお祈りして、懇親会になりました。山の様なお話しやら、カラオケも出まして、宴もたけなわ、夜の更けるのも忘れてなごやかに過させて戴きました。

朝は、ゆっくり九時出発。

熱海梅林では、花も見頃で美しく、また、あたたかかったので、ゆっくりと散策出来ましたが、山の上では前日の雪があちらこちらに残り、箱根十国峠でバスから降りた時には、風と寒さに追い立てられながら、やっとの思いで記念写真を撮りました。

この日の昼食は、待望の『楽趣里すゞひろ』での懐石料理。素晴しい料理の数々に舌鼓を打ったあとは、同店経営の合掌作りの結婚式場等、立派な店内を見せて戴き、外へ出ると、合掌作りに風花がちらつき、情緒いっぱい。

小田原駅でまたの再会を誓い合い、名残りを惜んで別れました。私達は、一路東京へと車を走らせ、東京駅には四時三十分頃着きました。本当に楽しい旅でした。

第25期決算報告書（自昭和63年1月1日　至昭和63年12月31日）

マーシャル方面遺族会

1　一般会計収支計算書

＜収入の部＞

科目	金額
前期より繰越	3,445,868
会費	2,478,000
寄附金等	1,507,880
受取利息	318,585
雑収入	54,270
（小計）	(4,358,735)
合計	7,804,603

＜支出の部＞

科目	金額
慰霊費	857,785
運営費	575,934
刊行費	890,144
印刷費	16,248
通信費	182,605
事務用品費	8,680
会議費	111,230
振替払込料	31,500
公租公課	63,622
名簿刊行費	1,300,000
雑費	11,660
（小計）	(4,049,408)
次期へ繰越	3,755,195
合計	7,804,603

2　一般会計財産目録（昭和63年12月31日現在）

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
現金	47,300	預り金（直会旅行費等）	542,500
普通預金	38,570		
通知預金	2,062,190		
金銭信託	594,007		
中期国債	55,628		
国債	1,500,000	（小計）	(542,500)
		次期へ繰越	3,755,195
合計	4,297,695	合計	4,297,695

3　特別会計　（現地慰霊碑維持基金勘定）

収入の部		支出の部	
前期より繰越	7,500,000	次期へ繰越	7,500,000
合計	7,5000,00	合計	7,500,000

（注）定額貯金並びに貸付信託として保管

平成元年2月12日

監査の結果上記の報告は適正且つ正確であることを認めます。

監事　髙橋鎮夫㊞
〃　柴崎晃㊞

マーシャル方面遺族会
会長　佐藤宗丕㊞

第26期一般会計予算

（自 昭和64年1月1日
至 平成元年11月30日）

＜収入の部＞

科目	金額
前期より繰越	3,755,195
会費	1,200,000
寄附金等	1,100,000
受取利息	300,000
雑収入	50,000
（小計）	(2,650,000)
合計	6,405,195

＜支出の部＞

科目	金額
慰霊費	950,000
運営費	600,000
刊行費	450,000
印刷費	20,000
通信費	150,000
事務用品費	10,000
会議費	150,000
振替払込料	30,000
公租公課	60,000
雑費	10,000
予備費	50,000
（小計）	(2,480,000)
次期へ繰越	3,925,195
合計	6,405,195

厚生省主催の現地慰霊

＝マーシャル諸島　ギルバート諸島＝

厚生省主催の昭和六十三年度現地慰霊巡拝団は、諸般の事情で年明けの一月二十三日に出発し、目的を充分果して一月三十日全員無事帰国しました。

行動概要

（時刻は何れも現地時間）

第一日　平成元年一月二十三日（月）

午後一時から厚生省で結団式を行ない説明会後、激しい雨の中をバスで出発九段会館で待機中の一般参加者と合流総参加者四十三名は国立千鳥ガ渕戦没者墓苑、靖国神社を参拝後、成田空港へ向かう。午後九時十五分、成田空港を離陸。（CO九六〇）愈々出発、皆緊張する。

第二日　一月二十四日（火）

午前一時十五分、グアム空港に到着。グアム第一ホテルに半泊後、午後一時十五分、グアム空港発マジュロへ向かう。（CO九五六）。果てしない空と海と千切れ雲の中を午後十一時マジュロ空港に到着。途中、激しいスコールの中をボナペ空港に着陸した時、着陸時の衝撃で後部座席左側七番の天井の扉が開き、中の非常用酸素吸入器が垂れ下がり、パイロットが点検に来て笑いながら英語で何か言いながら収納し直す。これを見ていた乗客一同が一斉に拍手する、というほほえましいハプニングがあった。マジュロ空港では夜中にもかかわらず島民が大勢出迎えてくれてマジュロサンホテルへ。ホテルへ着いてから急遽、予定変更の説明があり第二班は予定より一日早く夜が明け次第慰霊に赴くことになる。

第三日　一月二十五日（水）

第一・三班はマジュロ島内見学・末村団長他が政庁を表敬訪問した。

第二班は午前八時、マジュロ空港を出発。マロエラップ着、午前9時から滑走路脇ヤシ林内の、弾痕も生々しいゼロ戦の残骸に向かって、マロエラップ島慰霊祭を行なう。近くにはコンクリートの廃墟、爆弾跡が痛ましい。ウオッゼ島関係の団員も共に祈る。正午、別れを告げ、午後零時二十分ウオッゼ島に着陸。広場の一角で慰霊祭を行なう午後三時二十分、離陸、午後四時二十分、マジュロ空港に帰着した。

第四日　一月二十六日（木）

第一班は午前九時、マジュロ空港を出発。午前十時二十分、クェゼリン空港に到着。正午、司令官の出迎えを受けて司令官夫妻と昼食後、車で日本人墓地慰霊碑前で追悼式、更に島内巡拝を行ない午後六時、クェゼリンを出発午後七時十五分、マジュロ着。

第二班は午前、休息。午後、島内見学に出発、旧日本軍の弾薬庫跡、アレレ博物館の旧日本軍の錆びた武器類戦跡を見学した。

第三班は午前六時、朝食をすませてマジュロ発、タラワのボンリキ空港へ午前十時到着。国際協力事業団派遣職員の出迎えを受けて休憩後、午後一時からベシオ島内の戦跡を巡拝し、午後六時半から、宿泊のキリバスホテル内で友好協会主催による歓迎夕食会に臨む。キリバスホテルに一泊する。

第五日　一月二十七日（金）

第一・二班は、午前十時十分、マーシャル共和国所有船、マイクロ・パイロット号に乗船出帆。礁湖の中を一周しつつ洋上で正午から洋上慰霊祭を行ない、汽笛を合図に各班から二名ずつの代表及び団長が厚生大臣の花輪を、その後、団員も又それぞれお供物、花を捧げて遙かに英霊の冥福を祈った。午後四時半、ホテルに帰着。一休みして午後七時から市内の中華料理店で夕食会を行なう。

第三班はタラワのキリバスホテルからベシオ島へ向かい、午前九時から十一時迄、昭和五十七年七月に建立された「南瀛之碑」前で追悼式、玉砕された多くの英霊の慰霊を行なった。午後は友好協会の書記長宅に招待されて昼食会を行ない懇談し、現地政府職員と住民による唄とダンスの歓迎会で両国の交流を深めた。午後三時迄、タラワの港から乗船して一巡、洋上で散華された多くの英霊に花束を捧げて冥福を祈った。その後、ベシオ島の戦跡を見学。砲台、水陸両用車等の残骸を見る。オシンタイホテルに一泊。

第六日　一月二十八日（土）

第一、二班は午前、休息。午後、島内見学。午後六時半からホテル内で記念撮影、次いで島民代表を招待してパーティを行ない、ギルバートの民族舞踊団の踊りがあり、最後に団員も一緒に楽しく踊る。

第三班はタラワ島から、正午発の飛行機でマジュロへ帰る予定であったが飛行機整備の関係でもう一泊する事となり急遽、空港からホテルに戻り昼食をとり、午後再びベシオ島の戦跡を巡拝、オシンタイホテルに泊まる。

第七日　一月二十九日（日）

第一、二班は午前六時十五分、マイクロバスでサンホテルを出発。午前六時半から「東太平洋戦没者の碑」前で潮騒の静かに聞こえる中、マーシャルギルバート諸島並びにその周辺海域で戦没された英霊の合同追悼式が荘重に行なわれ御霊の靖らかな眠りを祈る。午前八時ホテルに帰着。

第三班は、ようやく午前九時半、タラワからマジュロ・サンホテルに帰着した。午前十時半、全員が揃ってマジュロ空港を出発（CO九五七）、一路

グアムへ向かう。午後六時半、グアム第一ホテルに入る。午後七時半からホテル内のアウトリガーレストランで総領事御夫妻、日本人会長御夫妻を招待して夕食会を行ない懇談した。

第八日　一月三十日（月）

最終日午前九時半、グアム第一ホテルを出発し島内見学、米軍の逆上陸で激戦が行なわれた、中央部のアガニヤ湾のパセオ公園に立つ自由の女神像、島の北部にある日本軍最後の地下壕司令部のあった「太平洋戦没者慰霊公苑」、その痛ましい大きな暗い壕跡等々、戦争の悲惨さが身に迫る。午後四時二十五分グアム空港を出発（CO九六五）。スコールの止んだ中を離陸、愈々帰国の途に着く。サイパン経由、夕焼けの中を飛ぶ。午後八時、成田空港税関を通過して解団式を行ない、お互いに又の再会を約して、名残りを惜しみながら解散した。

巡拝団参加者（一般参加者とも）

一班　〈クェゼリン〉　二十一名

団長　末村栄一　添乗員　樋口進
内海静枝　内海淑子
蓮尾諭吉　佐竹エス
荒木常子　遠藤安男
岩田とし子　藤田ヨリ
藤田正勝　山田キヨエ
浜田芳枝　渡辺三三
田賀朋子　田賀將一
秋山武　鐘ケ江敬介
近藤章　山田正三
片桐温子

二班　〈マロエラップ・ウオッゼ〉　十二名

班長　林造酒雄　添乗員　安部靖彦
岩川あい　秋本英郎
飯島一衛　金子晴佳
大森すず　赤坂スズ
山下治　秋本清子
三上幸雄　三上英雄

三班　〈タラワ〉　十名

班長　高野利雄　添乗員　渡辺芳久
加藤カヨ　鈴木ヨシエ
桜井妙義　桜井智子
坂本キヨ子　長尾静子
小寺洋子　植野八重子
合計　四十三名
（団長、班長は厚生省職員・添乗員は日通旅行社員）

現地慰霊巡拝に参加して

平成元年一月二十三日～三十日

マーシャル・ギルバート

参加された皆様から報告文、感想、礼状など沢山頂きましたが、紙面の都合で載せられないもの、一部を割愛したものもありますが、御了承下さい。各班共通の事柄は冒頭の「行動概要」にまとめさせて頂きました。

（第一班）蓮尾諭吉

待望のクェゼリンにおける慰霊祭は、二十六日に行われた。当日第一班の面々は、マジュロ空港からマーシャル航空のBAe（ブリティッシュ・エアロスペース）社製のHS七四八型機（日本のYS一一型機によく似たターボプロップ機）に乗り、約四三〇粁、一時間余の航程でクェゼリン空港に到着した。途中天候は晴天ではあったが、強風のため海面にはかなり白波が立っていた。

到着ロビーでは、司令官のP・R・ハリス陸軍大佐その他の方々の出迎えを受ける。麻薬犬による手荷物検査の後、報道渉外官E・P・ロビンス氏の案内で軍用バスによる島内巡回が行われた。

クェゼリン島は、米軍の第一線基地の一つであるため、ここに入るにはその都度厚生省から外務省を経てアメリカ国防総省の許可を得なければならないとのことであった。それにしても今までは一時間ほどの墓参しか許されなかったのに対し、今回は半日以上もかけて基地内の巡回を許され、昼食の歓待まで受け墓地での慰霊祭は心ゆくまで行うことができたが、これ一重に司令官の御厚情によるものと心から感謝に堪えない次第であった。

クェゼリン島は、クェゼリン環礁の主島であるが、この環礁は九十余の小島が点々と海上に頭を出して環状に連なっており、北端にある地続きの双子島ロイ・ナムール島（ルオット島）は、本島から約九〇粁離れている。また、西北端のエバデン島までは約一四〇粁ある。これらのうち米軍基地の主なものが、クェゼリン本島とロイ・ナムル島で、その他は無人島か原地の人々の住む島となっている。

本島内はすっかり整備されていて、戦の跡は全く見られなかったが、わずかに一個所日本軍が最後まで抵抗していた機関銃座の跡という厚いコンクリート製の蓋のようなものが見られただけであった。しかし、この島に対する砲爆撃がいかに凄まじかったかということは、鬱蒼としていた椰子の林が僅かに一本を残して全部薙ぎ払われてしまっていたということでも想像がつく。なおこの一本の木は今でも残っていて一際高く伸びていた。

基地では、今でもなお土地の造成が続けられており、各種の建物が作られている。軍人軍属や家族たちの宿舎を始め、マーケット、食堂喫茶室、クラブ、礼拝堂、病院、ゴルフの出来る広場、子供のための小学校からハイスクールまで諸施設は十分に整っているようであった。なお、基地内での個人の

足は、すべて自転車だけで、公用以外の自動車は一切使用禁止だそうであったが、年中強風の絶えないこの島では楽でないように見受けられた。

この島は、始めミサイル発射基地であったようであるが、これらは現在ロイ・ナムル島に移され、ここはレーダー基地になり、所々の屋上に白いレーダードームが見られた。

後列中央　ハリス司令官
後列向って左端　徳原勇様

基地の中を半分ほどバスで巡回した後、司令官を囲んで記念写真の撮影が行われた。終ってからクラブに入りバイキング方式の料理を各自で皿に盛り、将校集会室に入った。司令官から夫人を始め幹部の方々の紹介があった後、和気藹々裏に昼食会が催された。これに対し、当方からは団員の一人である遺族会副会長からガラスケースに入った日本人形がお礼として贈呈された。

昼食後、再びバスに乗り、日本人墓地に行った。日本人墓地は、基地の北寄りの所に、一五〇平方米ほどの地域を白塗りの低い木柵で囲み、中央に墓碑が置かれていた。この墓碑の写真はマーシャル方面遺族会が昨年の七月一日に発行した「二五年のあゆみ」の口絵に載っている。なお、この墓碑の複製が「忠魂慰霊副碑」として九段の遊就館に奉納されている。墓苑の入口には「日本人墓地」と和英両文で書かれた扁額を掲げた独特の形をした赤い鳥居が建てられていた。苑内は芝生敷きとなり、数本のあまり背の高くないタコの木が植えられ、手入れがよくされていた。ここにはクェゼリンで玉砕された日本軍の勇士数千名の遺骨を埋め、又マーシャル・ギルバート諸島附近で戦没された三万五千の英霊も祀られている由である。米軍が重要な第一線基地の中にこのような施設の設置を認め、それの維持管理を許していることに対しては、心から感謝せずにはおられなかった。

墓碑の花立てには、ハワイから態々持ってきてもらった赤いアンセリウムの花を挿し、急設の祭壇の両側には、厚生大臣からの花環を飾り、祭壇には各種の供物を供え、線香や蠟燭をともした上、一同揃って黙禱を捧げて英霊の御冥福を祈った。その後銘々で祈ったが、なかには熱心に読経をあげる女の人もいた。筆者の弟隆市（海軍少佐）はルオットで戦死したので是非現地にまで行ってみたかったが、今回は残念ながら諸種の都合で行かれず、次の機会に望みを託して、九〇粁手前から遙かに冥福を祈った。

慰霊を終ってから基地の残りを巡回して空港の出発ロビーに到着した。ロビーから搭乗口に向う途中に、司令官御夫妻外幹部の方々が整列しておられ、我々と一々握手をして別れを惜んだ。なお、我々が飛行機に乗って出発するまで見送っておられたのには全く頭の下がる思いがした。

二十七日には、第一班と第二班でマジュロ周辺における洋上慰霊祭が行われた（第三班はタラワ島に慰霊巡拝中のため不参加）。

これには、マーシャル諸島共和国にお願いして、政府所有の貨客船マイクロ・パイロット号（五〇〇トン級）を出してもらい、これでマジュロ環礁に囲まれた礁湖（東西約四三粁、南北約一二粁の中を巡航し、礁湖の中心部付近の洋上で気笛を合図に各自用意の供物を、最後に団長が厚生大臣からの花環を投下し、各自黙禱を捧げて慰霊を行った。

二十九日は、全員揃ってマジュロ島にある日本政府建立（昭和五十九年三月十六日）の「東太平洋戦没者の碑」の前に赴き、準備された祭壇に厚生大臣を始め各都道府県知事からの花環をそれぞれ飾り、果物その他の供物を供えて追悼式が挙行され、英霊の御冥福をお祈りした。以上で今回の慰霊行事は全て無事に終了した。

今回の慰霊巡拝に当りましては、厚生省の関係各位並びに遺族会役員の皆様、また日通の方々の多大な御努力と御苦労とによりまして万事滞りなく円滑に取り行われ、団員一同も互いに協力して一人の事故者もなく、それぞれ目的を果して無事帰国できましたことは誠に大慶至極に存じます。お世話になりました皆様に対し、心から厚く御礼申上げますと共に、今後とも宜敷く御好誼のほど御願い申上げる次第でございます。

実は私事今回の企てのあることについては、何も存じませんでした所、たまたま、亡弟の同期（海兵第六五期）で元厚生省課長、現在本遺族会の篤志会員であられる横溝幸四郎様からお知らせを受け、お願い致しましたところ早速関係方面へ御連絡下され、参加す

ることができました。一度は現地を訪ねて慰霊したいと思っておりました処今回近くまで行くことが出来て、様子が分り、誠に有難いことでした。この紙上をお借りして厚く御礼申上げます。（筆者は元明治大学工学部教授）

（第一班）佐竹エス

待ちに待った一月二十六日午前十時二〇分、マジュロから一時間二〇分でクェゼリン空港に着きました。

徳原勇さんが、迎えに見えておられアメリカ軍のバスで慰霊碑前に到着。慰霊碑には徳原徳子さんが手配して下さった、ハワイのアンセリウムの赤い花が供えられていました。

澄みきった青い空と海、明るく眩しい赤道直下常夏の島に心地良い風が吹き、私達を待っていてくれました。

Friday, February 3, 1989　MARSHALL ISL

nember battles in Marshalls, Kiribati

ased on Wotje Atoll during the war, and wives, ns, daughters, brothers nd sisters of soldiers who ed during the conflict.

During their brief five ty visit, members of the oup visited Tarawa, Kiribati, Kwajalein, Maloelap and Wotje.

On Sunday morning, before departing back to Japan, the group held a memorial service at the Peace Park on Majuro at 7:00 a.m.

Eiichi Suemura, a government official accompanying the group, said "my heart is full of great sadness and a deep regret because somehow this former battlefield looks so peaceful and yet it held such tragedy.

"Even as time passes and generations succeed generations, we must continue

遺族会からの御供物、靖国神社の御神酒とお水、千鳥ヶ渕墓苑の御神酒とお菓子、日本ローソク、お線香を御供えしました。（お供物は八ヶ所分にしてそれぞれ慰霊の場所にお供えしました）。厚生省の花輪とお供物、各個人のお供物で奇麗に整地された墓碑を飾り、その前に額ずきお祈りしました。

その後全島を案内して頂き、スナップ撮影等、基地司令官のご好意に依るものと思われますが、軍報道官や徳原さんが案内して下さいました。

二〇年前に私が目にした日本軍の桟橋は埋め立てられ大きく変り、クェゼリン島トレラーハウスも無くなり、鉄骨のビルとなっていました。一本だけ残った椰子の木、日本軍最後の砦も撮影出来ました。

昨年夏、佐藤会長はハリス司令官から慰霊団のルオット墓参の許可を得ておりましたが、一月に延期になったため御破算になりました。もしかしたらルオット島に行かれるかも知れないと楽しみにお供物も用意して行きましたが、結局は諦めることになりました。用意したお供物は徳原さんにお願いしてルオットのお墓に供えて頂きました。徳原さんから私共の墓参を報じた新聞や写真を頂きました。

（第一班）岩田　とし子

この度は厚生省とマーシャル方面遺族会の皆様のお骨折りにて慰霊巡拝に娘と二人参加出来ましたことを心より感謝致して居ります。

現地は子供の時見た軍事郵便の通り海碧く椰子の木茂り、クェゼリン島の特に高い一本だけ残った椰子の木は、幾千名の英霊の化身の様に思われ感無量でした。

戦時下、まだ私が十三歳の時、青い海に浮ぶ島の椰子の木の下で十名位の兵隊さんが半月に座って居る。その輪の中に亡兄と私が立って居る、その亡兄が私の肩をたたき乍ら、「此の島の名前を忘れないで」と何やら一言言ったところで目が覚め、その一言を思い出そうとしても解らずに居りました。そこに公報が入り十九年二月六日、時刻不詳南洋群島に於て戦死、横須賀海軍人事部長秋山勝三報告と有り、命日が、秋山門造司令官と同じなので、クェゼリン島だと思って居りました。

当時私には両親、兄、姉も居りましたのに何故子供の私に夢で知らせたのでしょう。長い年月を経て今は親も兄も亡く妹と二人だけになりました。今にして思えば亡兄は思いを私に託したのでしょう。三十三回忌には本籍地の茨城県の両親の許に石碑を建て供養し、重ねてこのたび現地慰霊巡拝に参加出来四十六年振りに念願が叶い亡兄もさぞや草葉の蔭にて喜こんで居ることと存じます。

ロイナムル（ルオット）には墓参出来ませんでしたが、福井県の田賀様、東京の蓮尾様にルオットの方面をお教え頂き黙禱を捧げご冥福をお祈り致しました。徳原様には種々便宜をお計り下さり明日九時の便にて、ルオットへお供物を届けて下さるとのこと、田賀様とお願い致しました。

お彼岸には早速茨城のお墓参りをして何十年も心に掛って居りました事を済ませ肩の荷を降す事が出来ました。

また巡拝中は現地の方や同行の皆様とは初めてお会いした方とは思われぬ程本当に娘共々お世話戴きまして誠に有難う御座居ました。

（第一班）鐘ヶ江　敬介

野辺の草花に春の匂いが感じられる季節と相成りましたが、その後皆様には益々御健勝のことと御喜び申し上げます。

トロピカルの熱帯の島から寒波襲来の日本へ帰ってきて体調はいかがですか、私などは南洋ボケがやっと治りかかった今日この頃でございます。

慰霊巡拝では父を、夫を子供を、そして兄弟を失なった肉親同士が英霊の最後の土の上に立って同じ心境にて故人に思いを馳せ、夫々が万感胸にこみ上げる如何ともし難い複雑なる気持で慰霊供養をなされたことと、存じま

す。

私も全く同じでございます。ともすると馬鹿げた戦争をした等という人もありますが、戦争そのものを云々するよりも肉親をあの時代あの状況の中で失なった者でないと解らぬ痛恨なる気持で生きて来た戦後の四十五年間、そして只今では食べる、生活することは第二義、第三義の経済発展の時代にはいり教育、文化の味も余暇の時間も味合うことの出来る素晴らしい日本の国になって居ります。

これは偏に、国民に代って一身を国に捧げた二百数十万柱の英霊のおかげであることを確認致した慰霊ツアーでございました。

何十年も前からの知合知己であるかの如き不思議な絆で結ばれた今回のツアーメンバーの皆様、現地では色々御世話になり且つ勝手な振る舞をなし御迷惑もかけたかと存じますが御容赦願います。

本当に有難うございました。これを御縁に集まる機会があったり、九州に来られましたら私に御連絡下さい。

（第一班）近藤　章

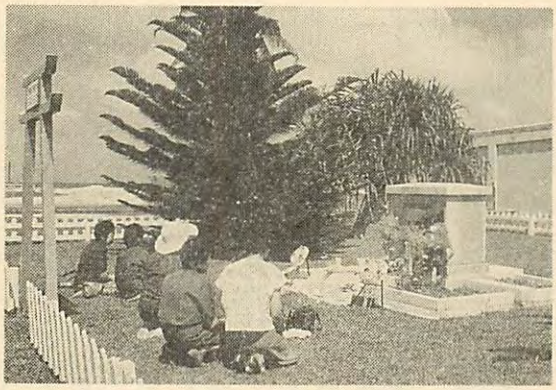
此の度、マーシャル方面の墓参りに参加させて頂き、また道中いろいろお世話になりまして誠に有難うご座居ました、飛行機がクェゼリンの空港に着陸した時、長い間抱いていた父の最後の地を訪れたいという夢が現実となった感激に、胸が熱くなるのを覚えました。

空港へ降りた時、米軍の兵士に温かい手で握手を求められ、思わず「サンキュウー」と言いました。島内ではハリス司令官の温かいもてなしに、感謝の気持ちで一杯でした。

わずか半日の現地慰霊でしたが、有りし日の父のいろいろな思い出が走馬燈の様に浮んできました。日本国から遙か遠い南の島で、御国のために戦われ亡くなられたと思うと、何とも言い様もない気持になりました。

此の度の現地慰霊祭に参加させて頂き誠に有難うご座居ました。

母をはじめ、兄弟達も感謝いたしております。また戦友の御家族と親しくなり、良い思い出となりました。



クエゼリン

これからは、毎年二月の慰霊祭にも参加させていただきたいと思います。

（第一班）浜田芳枝

写真を送っていただき有難うございました。先月は第一集からの環礁の合併本も送っていただき、少しづつ読んでおります。

私の父はクェゼリンで戦死ですが、母も昭和40年に亡くなり兄と二人きりの兄妹です。

マーシャル方面遺族会のことを、今回の旅行で始めて知りました。

父親は写真でしか知らず南の島にまさか行けるとは思ってもいませんでしたので、巡拝後の今でも夢を見ているようで、何とも言い表わすことのできない感動と感激で胸がいっぱいです。

環礁の一集をやっと読み終えたところですが、ここ迄になるには大変な御苦労のあった事が始めてわかり、感謝でいっぱいです。いただいた霊砂は父のお骨と思い、母の所に納めます。

これからも巡拝がある限り毎回でも参加したいと思っております。

今後共よろしく御願い申し上げます。

（第一班）秋山　武

クェゼリン島慰霊巡拝に当り御世話になりありがとうございました。

基地関係その他の方々の御協力で、とても良い慰霊が出来て感激しています。

マーシャル方面遺族会会員の総意の基に建立された慰霊碑ですから何時までも守っていきたいと思います。

現在の平和な社会の基礎になられた英霊を子孫に伝えるよう努力するのが私達若者の務めです。私に出来る事がありましたらお申付け下さい。

（第二班）秋本英郎

平成元年一月二十五日（水）、今回の慰霊巡拝第三日目、私達マロエラップ・二名とウオッゼ・八名・計十名の第二班は午前八時、マジュロ空港を離陸して果てしない太平洋を飛び午前八時四十分、目指す草原のマロエラップ空港に着陸した。初めての海外旅行で何も分からない私は、ただ皆さんの後に従った。わづかばかりの草の道をビデオカメラを回しながらの歩行は大変だったがやがてコンクリートの壊れた建物跡を道の右に見て進み、或る家の手前で止まった。子供たちが珍らしそうに後ろからゾロゾロとついてきた。通訳を介しての村長さんに、訪島趣旨の説明、了解、更にこれを参加者たちに説明があり、やがて又、引き返すようにして空港から百米程離れたヤシ林の中で祭壇の準備が始まった。気がついたら、そこにはゼロ戦が壊れたまま土に半ば埋もれていた。無数の弾

＜以下13頁へつづく＞

ブラウン環礁の玉砕（2）

矢野雄三

去来する三つの〃疑問符〃

――幸い、私が「ブラウン玉砕」の追跡究明を思い立った昭和五十六年半ば頃には、日中戦争の勃発から太平洋戦争終結までの一連の史実研究が実を結び、「公刊戦史」として全一〇二巻にのぼる『戦史叢書』（四一年八月～五五年一月）の発刊が、すでに完結していた。そこでは、敗戦に終わったあの戦争のさなかで、人間がどのような行動をとり、死にさらされたか……その根源に迫る丹念な史実の再現が、正確な史料を背景に展開されていた。

それまでにも、局地的な戦闘を記録した著作は数多く見られたが、それを戦争全体の流れの中に位置づけ、その戦闘そのものの意味を問うまでには至らぬものが多かっただけに、その考証を可能にする浩瀚な公刊戦史発刊の意義は大きかった。

〃実在の〃ブラウン守備隊が、陸軍少将・西田祥実（当時）を長とする新編成の『海上機動第一旅団』（主力二五八六名）であり、これと玉砕を共にした「海軍第六十一警備隊ブラウン派遣隊」（五九名）のほか、旅団軍属九五、航空・施設部隊、測量隊、民間労務者など合計七〇一名であったことも、すでに明らかにされていた。

また同時に、同環礁へ〃派遣予定〃の「海軍警備隊」が、それとは別個に存在していたことも、史実として決して間違ってはいないことがわかった。

――すなわち、昭和十八年末、青山英夫中佐が率いる「第六十八警備隊」（司令以下六二九名）が横須賀第一海兵団で編成され、一月二十四日愛国丸に乗船してブラウン環礁をめざし、二月一日無事トラック島に入港したところまでは、紛れもない事実だからだ。

だが、結局、この海軍部隊は「ブラウン」には進出していない。

公刊戦史によれば――折からマーシャル方面に米軍来攻中のため、ブラウン進出を見合わせてトラック島に待機中、メレヨン環礁（パラオとトラックのほぼ中間）への転進が決まり、同月十七日トラックを発ってメレヨンに向かう予定のところ、同日早朝から米機動部隊の〃トラック大空襲〃に際会して愛国丸は沈没、青山司令以下一部は戦死、生存者は十八日トラックを発ち翌十九日メレヨンに到達したというのが、ことの真相である。

無念にも、敵と一戦すら交えずしてトラック泊地に海没された青山英夫中佐（のち大佐）以下の将兵に対しては心からその冥福を祈らずにはおられないが、その史実がかくも長期にわたって不明のままに放置され、数々の誤認と混同の要因となってきたことに、ある種の憤りすら覚えたものである。

前号に紹介した富永謙吾氏の『大本営発表の真相史』が発刊された昭和四十五年といえば、公刊戦史の発刊が開始されてすでに四年、「ブラウン玉砕」についても、ほぼその全容が明らかとなりつつあった時期のことである。

何故に、正確な守備隊の把握がなされていないのか、理解に苦しむ。

同書にはまた、ブラウン玉砕がタラワ・マキン（ギルバート諸島）の失陥とほぼ同時期のように記されているが、この二つの玉砕の間には優に約三カ月の隔たりがある。恐らくクェゼリン・ルオットの玉砕（二月上旬）と混同されたのであろうが、それにしても「当時の状況全く不明のため、空しく埋もれることになった」とあるのは、いかにも説得力に欠ける。どこに〃状況明確な玉砕〃などあり得るだろうか。

戦後間もなく第一復員省から発表された『死亡認定理由書』（前号に全文掲載）に明記されているような電信の杜絶、米軍側の占領宣言、トラック島からの再三の偵察飛行など……全員玉砕と判断するうえで、それ以前の〃離島玉砕〃と格段に異なる情報量の欠除は、存在しなかったはずである。

同書の中に、ひたすら大本営〈未発表の真相史〉を求めた私にとっては、それが富永氏の力作だっただけに疑念はいっそう増幅された。

むろん、一国の存亡を賭しての総力戦のさなかである。戦争遂行上、国民の士気如何がきわめて重要な要素であることは、言をまたない。そのためには、一離島の玉砕を極秘裡に扱うことも時として容認さるべきだという議論もあろうが、ブラウン玉砕に関連して私が収集した数多くの資料は、その種の理解に対して決して肯定的ではないのである。

――公刊戦史の第六巻『中部太平洋陸軍作戦(1)マリアナ玉砕まで』の著者も、ブラウン失陥の最終部分で玉砕発表の〃差し止め〃に言及しておられるが、私には、その表現がきわめて微妙なニュアンスをもつものと思われてならない。

大本営は二月二十五日（昭和十九年）クェゼリン・ルオット島の玉砕を発表したが、ブラウン島の玉砕については、国内に与える士気上の影響を心配してか、とうとう未発表に終わった。（四二年六月三十日初版・二六九ページ、傍線筆者）

想うに、『大本営発表の真相史』が指摘しているように、大本営発表から異例に除外された二つの玉砕の島――グリーン島（二月十五日）とブラウン環礁（二月十九日～二十三日）の失陥がまさに同時期であったこと――、しか

も〝逆真珠湾〟とも言われたあの「トック大空襲」（二月十七日～十八日）に見舞われて、方面艦隊として直接作戦の任にあった「第四艦隊司令部」（ブラウン守備隊の指揮権をもつ）が、まさしく〝大混乱〟に陥ったことと決して無縁ではないはずである。

その日のトラック島は、厳戒下にあらねばならなかったにもかかわらず、信じ難いまでの無防備さを敵大機動部隊の前にさらけ出し、「東洋のジブラルタル」とまで言われたわが期待の洋上要塞も、為すところなく壊滅的な打撃を蒙り、そのダメージはまさに目を覆うものがあったからだ。（「海軍T事件」に発展する）

それだけではない。クェゼリン、ルオット島の玉砕（二月二日～六日）に踵を接して、群島西北端部に位置する「ブラウン環礁」までが、その後わずか半月余りで敵手に陥ち、帝国海軍が『絶対国防圏』における前進邀撃帯の重要部分と主張し続けてきたマーシャル群島全域が、それこそアッという間に席捲されてしまったのである。

大本営が、文字どおり衝撃と狼狽のウズに投げ込まれ、それが、その大混乱にいっそう拍車をかけ、新たな〝混迷〟を招いたことも想像に難くない。

――だが、そもそも十九年初頭といえば、従前からの主張である〝前方決戦〟構想がギルバート作戦以来実行不能に陥りつつあったとはいえ、わが『聯合艦隊』はまだ、かなりの余力を残していたはずではなかったのか。

最新鋭空母群からなる一大機動部隊を先頭に、突如マーシャル群島に襲いかかった米軍の〝大反攻〟が、戦史に類をみない大規模な水陸両用作戦であったとはいえ、クェゼリン・ルオット、ブラウンの島々にはついに一艦一機の来援もなく、虚しい〝玉砕戦法〟しか残されていなかったというのは、一体どうしたことなのだろうか。

疑問は、それだけには止まらなかった。さまざまな史料に目を通すにつれて、以前から私の脳裡に去来し続けた漠然たる疑念は、次第に明確な問いかけ――三つの〝疑問符〟の形をとりはじめた。そして、その一つ一つの疑問符に私なりの解釈を与えていくことが、とりもなおさず、この悲劇の環礁に散った『海上機動第一旅団』将兵へのささやかな〝鎮魂賦〟にもなると考えるようになった。

ブラウンの玉砕から、すでに四十余年――。余りにも遅きに失した行為といわれるかも知れないが、私自身にとっては、まだきわめて新しい問題なのである。

●何故に彼らは、開戦後わずか二年にして急遽、満洲の地から遙か南海の離島に派兵されなければならなかったのか。

●なぜに彼らは、同島上陸後わずか数週間にして、一艦一機の来援もなく、圧倒的な敵先制力の前に虚しく潰え去らねばならなかったのか。

●なぜに彼らは、その全員玉砕の事実を報じられることもなく、無名戦士のまま長らく葬り去られることになったのか。

●第一の疑問符

何故あの時期、満州部隊を南海へ

聯合艦隊の〝前方決戦〟思想

日米開戦以来、「大本営陸軍部」は中部太平洋の防衛（島嶼作戦）は海軍側に一任する方針をとってきたが、陸戦に不馴れな海軍が、当初、独自の兵力をもって離島ガダルカナル、ツラギに進攻した結果、国軍の全局作戦を左右するような事態を招いた戦訓から、この種の作戦への陸軍兵力派遣の必要性が強く打ち出され、昭和十八年春、陸海軍間の協議が成立した。――陸軍部隊の「第一次派遣」である。

公刊戦史によれば――大本営陸軍部第二課（作戦担当）では、同年三月頃までに決定された昭和十八年度兵備方針に基づいて、ギルバート諸島および南鳥島、ウエーキ島守備のための陸軍兵力の派遣を決定し、四月十二日付をもって「南海第一守備隊」（歩兵一コ大隊基幹、内地編成）をギルバートへ、「南海第二守備隊」（同）の南鳥島派遣を発令した。

――ところが、「南海第一守備隊」（藤野孫平中佐以下約八〇〇名）は五月二十日払暁、ヤルート島沖合二キロの地点で突如魚雷攻撃を受けて轟沈し、守備隊長以下多数が戦死したためギルバート進出は不可能となり、「南海第二守備隊」（吉原秀雄中佐以下、約六〇〇名）も、五月三日三重県大王崎沖で敵潜水艦の攻撃を受けて過半が海没し、いずれも所期の進出を果たすことはできなかった。

続いて六月二十六日、ウエーキ島配備を発令された「南海第三守備隊」（近森重治大佐以下、約九八〇名）の場合は、第八方面軍（ラバウル）より派遣の戦車中隊、歩兵部隊要員（約三〇〇名）が敵潜の攻撃を受け一部に被害を生じたものの、九月五日ウエーキ島に上陸、同部隊に編入された。

また、同日発令の「南海第四守備隊」（長・道下義行大佐）は、歩兵第六十一連隊（和歌山）で編成を完結し、八月中旬までに逐次、宇品からマーシャル・ギルバート方面に向かったが、折から南東方面（ソロモン・ニューギニア戦線）の防備強化が焦眉の急となったため、七月十七日、急遽ブーゲンビル島南部への転用が決まり、新たに同日付をもって、フィリピンに駐留中の第六十五旅団の一部（歩兵第百二十二聯隊基幹、のちの「南洋第一支隊」）が、これに代わってマーシャル方面へ派遣されることになる。

聯隊長・大石千里大佐以下約一九〇〇名は、マニラ付近に集結して所要の訓練を終え、八月二十四日マニラを出港、トラックを経由して九月七日クェ

ゼリン環礁に到着、聯隊本部と一コ中隊をクェゼリンに置き、その他はマロエラップ、ミレ、ウオッゼ島に派遣、それぞれ海軍第六十三、第六十六、第六十四警備隊司令の指揮下に入った。

この時期、マーシャル諸島の離島守備隊は、ほとんどが「海軍陸戦隊」の将兵で編成され、この「歩兵第百二十二聯隊」がクェゼリン環礁に到着するまでは、この方面の陸軍部隊の存在は皆無といってよかった。

だが、この第一次派兵のさなかにあってさえ、洋上離島の防衛をめぐる陸海軍間の対立は徐々に表面化し、次第にエスカレートしていくのである。

五月八日、山本前長官の後任として聯合艦隊司令長官を拝命した古賀峯一大将は、内南洋方面の作戦と防備について関係部隊の参謀たちをトラックに碇泊中の旗艦「武蔵」に集め、有名な最初の訓示を行なった。（傍線筆者）

すでに日本海軍の兵力は、対米半量以下に低下した。そのうえ、ラバウル陸上航空戦実施の結果、航空決戦兵力の精鋭を失い、かりにわが所望の全力邀撃作戦を行ない得たとしても、勝算は著しく低下し、三分の勝ち目もない。ここに至って彼我戦力の懸隔は、如何ともすることができない。海軍作戦に関する限り玉砕戦法を行ない、われ倒れるもなお彼に大損害を与え、時を稼ぐ以外に方法はない。結局は、他の正面の作戦は顧みず、ひたすらマーシャル、ギルバートの線を邀撃帯として、艦隊決戦を企図することである。戦略的にも地理的にもわれに有利なマーシャルの線において早期決戦を実施することが、最大の戦果を期待し得る唯一つの戦法であると確信する。

古賀長官のこの訓示は、同年三月二十五日に決定された「第三段作戦帝国海軍作戦方針」に基づくものであったと考えられる。実際の発令は、前長官の不慮の戦死（五月十八日）などにより八月中旬の発令となったが、その趣旨とするところによれば、『聯合艦隊は、太平洋および南東方面の各邀撃帯において、来攻する敵を拒止する。敵主力艦隊の来攻に際しては、トラックに待機せる聯合艦隊の全力でこの敵を邀撃する』というもので、明らかに、マーシャル群島周辺で雌雄を決しようとする〃前方決戦〃思想を強調するものであった。

その底流に、帝国海軍が日露戦争の直後から堅持してきた〃漸減作戦〃の思想があったことはいうまでもない。

仮想敵である米軍海軍は、ハワイから輪型陣を組んで、フィリピンないしは直接日本に攻撃を仕掛けてくる。帝国海軍はまず、マーシャル群島付近で空母もしくは潜水艦の奇襲によって、これに損害を与え、ついで小笠原諸島東方海面において水雷戦隊の襲撃によりさらに敵の損害を増大させる。そして、いよいよ敵が本土に接近したところで、戦艦部隊が出撃して雌雄を決する。その頃には敵の戦艦も〃漸減〃して、わが方と同兵力となり、猛訓練で鍛え抜いた帝国海軍が勝つ——という論法である。

——古賀長官の訓示の四日後（五月十二日）には、早くも北方戦線がにわかに騒然となり、米軍約一コ師団が「アッツ島」に上陸を開始してきた。

しかし、大本営海軍部は十八日、聯合艦隊に対して「アッツ島増援中止内定」を打電、同島への増援奪回作戦が主として艦隊作戦の見地から見送られたため、山崎保代大佐以下のアッツ島守備隊は、寡兵よく奮戦力闘したが及ばず、五月二十九日、全員玉砕の運命をたどることになる。

離島守備隊の〃玉砕〃は初めてのことだけに、その衝撃波は大きく、中部太平洋東正面からインド洋にわたる外郭離島の防衛は、いっそう切実な問題となっていった。

——陛下は、いたくアッツの玉砕を遺憾とされ、とりわけ陸海軍が緊密に共同して作戦に当たるべき点を強調され、『どこかで敵を撃破することはできないのか』と洩らされたという。

陸海〃戦略思想〃の対立

——それより少し前、南方各地を視察して四月二十日に帰京した吉田喜八郎少将（航空通信保安局長官）は、杉山参謀総長に対し次の要旨の報告を行なっている。

敵反撃の威力と速度は予想以上に大模かつ迅速であり、南太平洋方面の現作戦目的は航空情勢の推移、特に後方補給の問題から達成不可能と断ぜざるを得ない。従って同方面の第一線はパラオ諸島、西部ニューギニア、チモール島の線に後退し、モルッカ諸島、セレベス島方面で作戦する準備が必要である。よろしく、これまでの行きがかりを捨て、全作戦の将来を見通し、断固として戦略転換を行なわれたい。（傍線筆者）

陸軍の一部には、ガ島争奪戦に敗退した頃から、早くも〃戦線後退〃の声があがっており、それに続くソロモン、ニューギニアでの苦戦、アッツ島玉砕などの状況から推して、すでに帝国海軍が呼号する〃海上決戦〃の成算に対し多分の疑念を抱いていた。

アッツ島玉砕の五月二十九日以降、北方作戦に対応するため東京湾上にあった聯合艦隊司令部を交え、陸海両作戦課を中心とした「作戦研究会」が開かれたが、ここでも、その根本思想の違いが争点となった。

その一部を『真田穣一郎少将日記摘録』（陸軍部作戦課長、八月以降作戦部長）から引用する。（傍線筆者）

——まず口火を切ったのは、陸軍の高瀬啓治中佐（第二課作戦班長）である。

「ナウル、オーシャンに僅かの守備兵力を海軍側は出せと言われるが、陸軍上層部はそんな遠隔の離島に配兵しても、またアッツの玉砕を繰り返すばかり。真にわが海空兵力を集中発揮して決戦し得る主戦場以外の地域に力を分散するのは真平御免を蒙りたいという意見である。そこで失礼ながらお尋ねするが、ミッドウェー海戦以後の帝国海軍に果たして、ニューギニア、ソロモン、マーシャル、マリアナ、西部アリューシャンを外郭防禦線として真面目な決戦を指導するだけの実力がおありかどうか。こちらの実力に比べて、土俵が大きすぎるのではない

か」

――満堂寂として声なし。このとき聯合艦隊の藤井茂参謀立って応答に当たる。

「情勢は、開戦以来ラバウルからビルマまでを攻略した第一段作戦に引き続き、ミッドウェー海戦、西部アリューシャンの要衝攻略の頃までを第二段作戦とし、いまやガ島反攻、アッツ反攻と第三段作戦に入っている。この第三段階期には、敵は図に乗って攻撃速度を速めてくると考えられる。これを〝千早城戦法〟をもって、引きつけておいて叩きつけなければならない。この際、局地を守るのはこの戦法でゆき、洋上戦力は〝バルチック艦隊邀撃戦法〟で叩けば、十分自信は持てる。基地航空兵力は、トラック、ニューギニア方面よりマーシャルへは三日以内で出てゆける。陸上の守兵は一週間持たせる。死守させる。

すなわち、根本思想としては、バルト艦隊をカムラン湾等で叩かずに日本海で邀撃したと同様、わが邀撃帯の線――換言すれば、わが基地航空の威力圏内において叩こうというもので、この思想をもってすれば、この土俵も決して無理ではないと考える」

時の軍務局内部にも、「現在の船舶事情から推定するに、あらゆる方途を講じても、持久はできても反撃力は絶対に出ない。マリアナ、カロリンの線に留まらないで、一気にフィリピンまで退がるのがよい」（同年六月頃）という、思い切った発言もあったくらいである。

しかも、米軍のガ島来襲から一年余を経た十九年夏頃ともなると、がわ方はすでに国力を超える激しい消耗戦を強いられており、南東方面の情勢も日を逐って悪化（やがて十月初めには、中部ソロモンが完全に米軍の手に帰すことになる）の一途をたどっていた。欧州戦線も逐次枢軸側に不利となりつつあり、イタリアの降伏（九月八日）によってインド洋方面への英艦隊の増派来援も懸念されるなど、重大な情勢の変化を迎えていた。

このまま推移すれば国力の基礎は潰え、国家衰亡の道をたどる虞れがあった。とくに戦力造成の根源である船舶の損失は開戦当初の予想をはるかに大きく上回わり、重大な局面に立たされていた。この危機を打開するには、不断に追及してくる敵戦力との間合いをとり、国力に相応しい戦場に後退して反撃態勢を固める以外に途はないが、それにしては、わが後方要線の防備はきわめて希薄というしかなかった。

（公刊戦史）

昭和十八年九月三十日、『今後採ルベキ戦争指導ノ大綱』が御前会議で最終決定し、それまで大本営が採ってきた戦争指導の方針に根本的な大転換が加えられることになったのも、そうした危機感に促されてのことであった。

大本営としては、この際、広大な戦域を思い切って縮小し、敵の進攻に対して歯止めの一線を画すため、太平洋およびインド洋において絶対確保すべき要域を設定することになり、それを「千島、小笠原、内南洋（中西部）及び西部ニューギニア、スンダ、ビルマを含む圏域」と定めた。――いわゆる『絶対国防圏』の設定である。

だが、この「絶対国防圏」の構想自体にも、陸海軍間では少なからぬ認識の相違があった。

九月十五日、御前会議の席上で行なわれた陸海両総長の〝上奏〟内容にも微妙な食い違いがみられる。

杉山参謀総長は、その中で「現占領地域ニ於テ極力持久ヲ策シ、此ノ間速カニ後方要線ノ防備ヲ完成シ、以テ反撃戦力ヲ整備ス」と上奏したのに対し、永野軍部令長は「カロリン諸島など後方要線の防備強化に言及しながらも、「マーシャル、ギルバート方面ハ海軍トシテハ極メテ有利ナル決戦場ト考エルノデ、為シ得ル限リ之ガ確保ニ努メ、此ノ戦場デ敵ヲ捕捉撃滅スルニ努メル』と述べている。

端的に言って、陸軍は後方要線において反撃しようとし、海軍は、その遙か前方にあるマーシャル、ギルバート海域に出撃して〝決戦〟を求めようとしていた。

海軍側の見解によれば、後方要線とはその線で敵を撃つというより、前方要線に来攻する敵を叩くための反撃進発線――言い換えれば、反撃力蓄積のための足場にすぎないことになる。

後方要線を前述の「絶対国防圏」とする場合、トラックだけが前方に突出しており、マーシャル諸島はさらにその東方二〇〇〇粁の彼方にある。

くどいようだが、海軍側では「敵主力艦隊の来攻時にはまず、マーシャル群島にある多数の飛行基地群を利用して敵を邀撃し、その間に聯合艦隊主力がトラックからマーシャル海域へ出動して決戦を交える――」というのが、当時の「海軍中央部」を代表する考え方であった。これでは、海軍に関する限り防衛線を後退したことにはならず、陸海軍別個の戦略構想となり、絶対国防圏構想そのものにも曖昧さが残らざるを得ない。

戦後、元陸軍省軍務局長・佐藤賢了中将は、次のように回想している。

海軍は前方で決戦しようとしていた。それは絶対国防圏思想とは根本的に背馳するものであった。こうして、絶対国防圏の構想と海軍の戦略方針とには大きな罅隙が生じ、絶対国防圏に関する御前会議の決定は作文上の一致にすぎないことになった。

（傍線筆者）

それだけに、この年の五月十八日に戦死した山本前司令長官が、あの時期、海軍首脳部の抜き難い〝前方決戦〟思想とはまさに対照的な「マリアナまでの撤収をふくむ次期作戦構想」を抱いていたことは注目に価しよう。

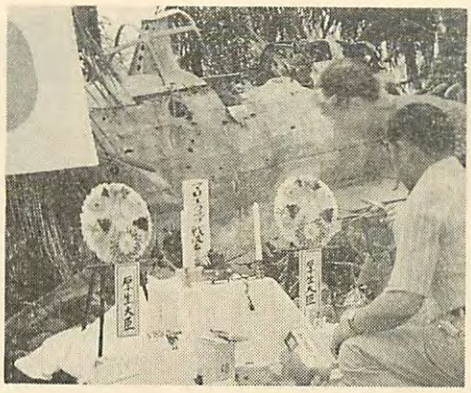
この後（筆者注、五月十六日の「い」号作戦終結後）につづく山本の作戦構想は渡辺戦務参謀によると、できるだけ早くマリアナの線にまで戦線を縮小することだったという。米海軍の兵力建設と蓄積がすすまないうちに、戦線を縮小しておき、兵力の密度を濃くし、反撃力を強めておこう。それには、この機を逸してはいけないと考えることができ、何よりもそれを果断に実行に移すことができたのは、山本一人ではなかったか。（吉田俊雄著『四人の聯合艦隊司令長官』より）

（以下次号）

〈8頁よりつづく〉

痕……その痛ましさ……ビデオカメラを操作する私の手はブルブルと震えた。戦いの厳しさがナマナマしく全身を走った。……私にとって今回の慰霊巡拝で初めて見る、それはきわめて衝撃的な光景であった。

午前九時、慰霊祭開始、皆黙々と黙禱し、お供物、故郷からの、亡き同胞の好物、お線香等を捧げて祈る。誰も殆ど口をきかない。今は亡き同胞を偲び胸一杯なのであろう。……午前九時半、慰霊祭は終わり、その後、遺族たちは島の状況を見に行き私達ウオッゼ組は飛行機近くのヤシ林のなかで休憩した。私はその間、奥へ続いている道を入っていった。かすかな道を辿って行くと、道の両脇は直径五、六米の大穴が至る所にあり、それは「米軍の落した、戦時中の爆弾のあと」であった。左側にプロペラの朽ちたのがあり更にその先にはコンクリートの大きな建物が蔓草の絡まったままにヤシ林の中に音もなく建っていた。恐らく司令部か何かであったのだろう。その先には島民の家が数軒見えた。激しいスコールが過ぎた後、記念撮影をして離陸、一路ウオッゼへ向かう。



マロエラップ

再び果てしない茫洋たる太平洋を飛ぶこと三十分、午前十時二十分、機は目指すウオッゼ島に着陸。一同は歩いて広場の片隅の、小学校の一室で訪島趣旨の説明、参加者の紹介、更に戦没場所の確認等を行ない。祭壇場所を決める。大きな、窓のない倉庫のような建物に行ったが、次にコンクリートの、航空隊の指揮所跡のような建物前で行なうことになり、祭壇の準備が始められた。島民が回りで見ている。特に子供が多いのには驚いた。マロエラップと同様に故郷からのお供物等が捧げられて、午前十一時四十五分、悲しみの内厳粛に慰霊祭を開始、黙禱、お線香を上げて亡き肉親の冥福を祈る……。十二時半、無事、慰霊祭を終了して十二時四十五分から各自、別れてそれぞれの地区に行く。私は家内と二人で亡兄の戦死した、外海の第二砲台に行くことになり、同行の生還者、山下さんに外海への道を聞いて出発したが何しろ西も東も見当がつかない。とにかく飛行場の、機の着陸している反対側のヤシ林に入っていったが、結局、途中で道がなくなりまた、時間もなく涙をのんで引き返さざるを得なかった。午後二時四十分、一同が学校に集合、島民の心尽くしのスイカ、パパイヤ、マンゴー等を御馳走になり、午後三時、離陸、尽きない思いを窓から眺める。

「再び来ることが出来るだろうか……」

誰もが同じ思いを抱いていたに違いない。皆黙って窓外を見詰めたまま……。この太平洋の中の美しい小さな島で、かつてリーフを血に染めて戦が行なわれたとは……。やがて島陰は茫洋として小さく水平線の彼方に消えていった。……

マジュロへ向かう機内で、私は考えた。

「島の現況図が必要だ。それは始めて島に来る人が無駄な時間を掛けないために……。何とかしなければ」と。

海眠れ　島また眠れ　みんなみの
　御霊は永久に　靖らけくあれ

ハマグルマ　いとも小さき　花なれど
　花好きの亡兄　見守りおらむ

形見なる　数珠をさぐりて　心経を
　唱えんとすれど　声にはならず

（第二班）　三上幸雄

まだ寒い成田の夜を出発、サイパングアムを経てマジュロに着きました。マジュロの宿舎は平屋で、玄関に真紅のハイビスカスが咲いていました。

一月二十五日いよいよ今日はウオッゼです。

美しいエメラルドグリーンのマロエラップの環礁もすぎて、私ら二班十一名の飛行機が椰子の樹の間のひろばに着くと、〝環礁〟の先輩達がお書きになったように、黒い肌の子供達が、人なつこそうな目をして、飛行機をかこみました。そして小さな小屋のような家、みんな軒ばに縄をはって、洗濯ものがヒラヒラと、それにまわりの草の上にも、亭々と椰子が繁茂しています。これがウオッゼか！

やがて慰霊式が形どおり行われました、日の丸が樹と樹の間に張られ、白布に被われた壇には、ウオッゼ戦没者の霊が祀られ、厚生大臣の花輪二基、お酒、たばこ、いろいろな食べもの、叮寧に半紙に十枚書かれたと言う般若心経、また濃い藍の浴衣が目を惹きました。湯浴みさせて、の親心か、お灯明が灯され、みんな涙ぐんで額づきました。

お祀りをすませて、弟と海へ急ぎました、蔓草のからまる人の少しは歩いたらしい道です、耳を澄ますと遠くで海が鳴ってるようです、やがて蒼い蒼

ウオッゼ

私と弟は、数珠を掌にして、磯辺の砂をお骨がわりに、少し頂きました。「ウオッゼ島のもろもろの霊安かれ」と、心に深く念じつつ……。海鳴りは故郷の海の響きにも聞えます、ふりかへりふりかへり、椰子の島をあとに致しました―。

（第三班）小寺洋子

私達三班は、妻二、遺児四、妹一、遺児の妻一　厚生省の方一人　添乗員さん一人　計十名で　タラワに向いました。飛行機の都合で一日遅れて二十六日八時十五分小型機でマジュロ空港を飛び、マキンを低空飛行で旋回して頂き十時三十分タラワに着きました。四十六年前、血で真赤に染ったとは、思えない静かな珊瑚礁の島、内海の水の色は絵の具を流したような素晴らしい別世界です。

バイリキ空港からマイクロバスにてキリバスホテルへ、昼食後二十七日の慰霊祭の準備の為の買物に出掛けての帰り、島の東側の外海辺を戦跡めぐりをする事が出来ました。爆撃を受けて中から真赤に錆びた鉄骨がはみ出した砲台の上に大砲が海に向って据え付けられ、戦車や爆薬庫等、中心部にある司令部の天井や壁も鉄骨がむき出しに戦争の激しさを手に取るように見せ付けられました。一滴の水も飲まないで散っていった御英霊がかわいそうでした。

二十七日朝九時から日本墓地で慰霊祭が行なわれました。皆さん、思い思いに故郷から持ち寄った。お水やお酒肉親の好物であった物をお供えし、個々にお焼香をし、いつかまた来る事を心に願いつつ長年の思いを語らい報告をしお別れを惜みました。

式後昼食をキリバス日本友好協会書記長さん宅でいただき手厚いおもてなしを受けました。

時間も経過し二時からボートにて、内海から島南部を回り外海へと海上慰霊をしました。一人一人が花束を捧げて、遠い異国の地に眠る御英霊に安らかにと祈らずにはいられませんでした。海中には、米軍の飛行機や舟艇が無残な姿で見えます。

タラワ

二十八日、マジュロにて合同慰霊祭を行うため出発の予定でしたが、飛行機の都合が悪くなったため引返し、前日出来なかった南部の方をバスにて巡回して頂ける事になり、海に向っている大砲、壊われた弾薬庫、民家の近くにある爆弾（不発弾）等小さな島中どこを歩いても当時の日本兵が必要とした武器に突き当ると言う。その島に住む人達は、のんびりと大らかで人なつっこく、日本墓地も三日に一度は掃除をしていただいていると伺い、安心して帰ることが出来ました。

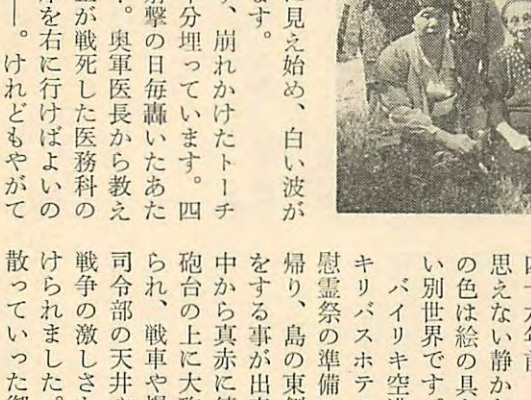
国際協力事業団現地派遣員の皆さんには特に親切にして頂き、皆さん誰一人として体調をくずす事なく、元気で帰る事が出来ましたのも英霊のお陰とうれしく思います。

（第三班）鈴木ヨシエ

桜の季節になると、どうしても靖国神社、千鳥ヶ渕へと足が向かってしまう私です。

二ヶ月前のマーシャル、ギルバート方面の慰霊巡拝、そして帰国後の靖国神社での慰霊祭、直会旅行と皆様に大そうお世話になりました。本当に有り難うございました。

お彼岸を迎えて、やっと心身共に従来の生活のペースに戻った感じですが行く前の準備よりも帰ってからの報告、原稿の提出、写真の整理、発送、手紙の返事等、結構忙しい日々で、四



いい海が草の向うに見え始め、白い波が岩礁に寄せています。

ここは外海です、崩れかけたトーチカが二つ砂利に半分埋っています。四十余年前に艦砲射撃の日毎轟いたあたりでしょうか……。奥軍医長から教えて頂いた、兄の正が戦死した医務科の防空壕はこの海岸を右に行けばよいのかも知れません――。けれどもやがてもう別れを告げねばなりません。

十五年目にして父の戦没地を初めて訪れ、感じた事を貴重な体験資料として次代を担う者に語り継ぎ、祖国を守る為に命を捧げて逝った人々、そして我が父に報いたいと願っております。

同じ立場、境遇でなければ通じ合えない同志的な結び付きは、会に入って初めて全国の方々に触れ合う機会を得て良かったと思います。

母は八十一歳の高齢で足も不自由となり、娘の私が変わってやるようになって二年目になります。

元号が変わっても戦後処理が終わったとは思えませんし、国家の為に命を捨てた人々に報わずに片づけて良いものでは無いと思います。誰よりも遺族が一致団結して働きかけなければ、すべて過去の遺物としてしまわれるでしょう。

洋上慰霊

私は県の遺族会の青壮年部に入会して未だ一年で良く分かりませんが、元号が「平成」へと変わったこの時こそ先の大戦に於いて、国の命令で戦場に馳せ祖国の為に身を挺し命を捧げた人々や、戦争犠牲者に報いる事は当然のことと考えます。

慰霊巡拝により現地を訪れた遺族は様々な思いの中で帰られたと思います。然し肉親の供養のみに留めては惜しい気がいたします。遺族以外の人々に事実を伝えていく事によって、戦争の無残さ、悲惨さ、虚しさを知らせ、二度と愚かな戦争を繰り返さぬ様、特に戦争を知らない若者に語り継いでいく責務を感じました。

又政府には遺族が切実に願う資料を作って頂きたいものと痛切に感じた次第です。

（第三班）　坂本　キヨ子

私は今年一月ギルバート諸島巡拝に参加した一人です。出発前には見知らぬ南洋の島タラワ島を訪れることに不安と緊張感がまじり、一方、亡き父の御霊に会える懐かしさでいっぱいでした。

その後、皆様のあたたかい御配慮により、現地の様子等を知らせる〝環礁〟を贈呈くださり大変参考になり気持もだいぶやわらぎました。

ほんとうに有難うございました。厚く御礼を申し上げます。

飛行機に乗ること十数時間、目的地タラワへ着いた時は空港のどこかで亡き父が出迎えているようで、周囲を思わずぐるりと見廻して仕舞いました。

お父さん私達を守っていただいてありがとう、母を初め家族は皆元気ですどうぞ御安心下さい、と心でつぶやき四十数年の思いが一気に涙となって流れてしまいました。

政庁が丁重に管理して下さっている慰霊公園の中央の南瀛之碑にお花を飾り祖国より持参した、数々のお供え物を供えて心ゆくまで参拝させていただきました。島を巡回し激戦を偲ばせる個所ばかり、どこもかしこも涙なしでは語れない戦跡が陸に海に散乱し、改めて戦争地獄のすごさを考えさせられました。

此の度を機に是非遺族会に入会し、これより先の島の様子等、又会員の皆様から内容の深いお話をお聞きし親睦を深めたいと思います。

会費二千円同封致しました。

よろしくお願い申し上げます。

ほんとうにありがとうございました。

「マーシャル方面遺族会」に感謝

新潟県　山田　正三

この度、厚生省、マーシャル方面遺族会、県遺族会、日本通運㈱等々各方面の格別のご配慮により、「マーシャル・ギルバート諸島慰霊巡拝団」に参加する幸運に恵まれました。

これ等関係団体の周到な計画と準備により、私たち巡拝団一同永年の悲願である戦没者の現地慰霊巡拝の目的を達することができました。

また日常の起居、食事など家庭以上の快適なる環境で楽しく過すことができました。

衷心より厚くお礼を申し上げます。

さて、慰霊巡拝の実情報告につきましては、この度の慰霊巡拝団に参加されました他の方に譲り、同行されました本遺族会役員の、佐竹エスさんと荒木常子さんよりお伺いしたお話をもとにして、私の心を痛めているところを述べさせてもらいます。

今次大戦中、マーシャル方面での戦没者は約三万人ともいわれています。単純計算をすれば、その遺族は三万戸にも及びます。

ところが意外にも、本遺族会の会員は現在僅か八〇〇人だそうです。戦死者の僅か三%に過ぎません。

これは、一体どうしたことでしょう。

ご両親の高齢や逝去された方もおられましょうが、兄弟姉妹、甥、姪など肉親の健在の方も多い筈です。

本遺族会に未加入者の多いのは、この会が結成されていることを知らない方が膨大な数にのぼるためと思います。これが一番大きな理由でしょう。

お恥しい次第ですが、私も地元の新聞にお願いし、昨年二月漸く、この会のあることを知り、早速今回の慰霊巡拝団に参加した次第です。

お金も必要でしょうが、なんとか手配をされて、新聞、テレビ等にお願いして、未知の方に会の存在をお知らせし、新会員の増加につとめてください。

また、現会員よりの口こみ加入勧誘も大切だと思います。

それから、佐竹さんや荒木さんのお話によれば、本遺族会の事務所は、佐藤会長さんの経営する会社を無料で提供されており、ここ数年は常勤の職員を置かず、事務の一部をパートに頼んではいるが大部分の業務は会長さん以下の役員（奥さん方も）が奉仕しておられるのだそうです。

八〇〇人会員の連絡、環礁編集、その他慰霊祭などの行事運営等大変なお仕事と推察します。

役員会員が心を一つにして奉仕活動に徹しているとのことです。

然し、私たち一般会員は、当然なこととして役員の善意に甘えてよいでしょうか。

大勢の会員の協力で、多少なりともボランティアの方々に、物心両面よりの感謝の誠を捧げたいと思います。

会長さんはじめ、役員の方々、大変ご苦労様ですが、今後ともよろしくお願いします。

お便りの中から

秋田県　加藤カヨ

先日は「環礁」をお送り下さいまして、まことにありがとう御座居ました。私はこんな立派な会がある事を長い年月全く知りませんでした。知って居りましたら、もっと早く会員として入会させて戴いて居りましたでしょう。何も分らぬ私ですがどうか入会させて下さい。

私の夫は、ギルバート諸島のタラワ島に於て玉砕しました。十八年十一月二十五日でした。死んだ主人の娘が二人、五十歳と四十六歳です。私は生きているうちに一回はタラワ島に行って亡き主人を偲びその魂を抱きしめ語り合って来たいと思って居ります。

もう私も七十歳ですが毎日の仕事は五十歳代六十歳代の人にも負けない程の重労働です。でもこれも致し方ありません、私に与えられた宿命です。

十一月のマーシャル、ギルバート諸島墓参計画をお聞きしておりましたが、延期になったそうで、秋田県庁の方からお電話を頂きました。私は早くから申し込んでおりました。一月の何日か未だ聞いておりません。秋田県からは一人とか聞いておりますが、私は是非行ってみたいと思って居りますので、よろしくお願い致します。

日中の重労働に代って夜は本を読んだり、縫いぐるみ作りやちぎり絵等好きな事で余生を楽しみ、毎晩就寝は十二時過ぎ、朝は五時起きです。

会費二千円と、ほんの少しですが、残りは御寄付させて頂きます。

お送り頂いたすばらしい「環礁」、もっと早く読みたかったと思います。感謝の気持でいっぱいでおります。

今後ともよろしくお願い致します。

（注、加藤さんは一月の現地慰霊に参加し念願を果して無事帰られました）

富山県　村梶光栄

暖冬も過ぎ動物も植物も早い春の香りにせかされているようなこの頃でございます。

二月十二、十三日の慰霊祭、直会旅行に参加させて頂き恙なく無事に終りありがとうございました。

旅行のお写真を幾枚もお送り下されアルバムを飾ることが出来まして楽しく当時を思い出して居ります。

今年も英霊の御加護により、天候にも恵まれ熱海梅園も満開で丁度見頃、紅梅白梅の香り漂う梅林を散策し、十国峠を廻って昼食では珍らしい懐石料理を賞味してとても楽しい旅で嬉しゅうございました。いろいろ御世話になりご苦労の程ありがとうございました。

経済大国、そして世界一平和で安全な日本に生きる幸を思う時、戦死された方々の犠牲によって現在の日本の繁栄のある事を忘れてはならないと思います。

年に一度全国各地より遺族の方々が靖国神社に集り、慰霊祭を行うこの素晴らしい会が何時までも続いて行く事を心から願って居ります。私も唯今からもう来年の慰霊祭に参加することを目標にして、元気で又皆様方にお会い出来るようにと楽しみにして居ります。

会長様を始め役員の皆様方には大変御多忙の処を何かとこの会の為に御尽力下されお世話いただくことを深く深く感謝致して居ります。

新潟県　米田トシ

御礼状も差し上げない内に、又々楽しかった想い出の写真送って頂きまして感謝致しております。二年続けて病人やら入院やらでお参りにも行けなくて気にかかって居りましたが、今年は

（次頁下段へ続く）

慰霊祭参列者芳名

（敬称略）

今年二月十二日の慰霊祭に次の皆様が参列されました。氏名は参集所で出席票に署名した通りにしてありますので、参列しても署名をしなかった方は載せてありません。

総数は一八七名で、毎年若い方々が増えてくるのは喜ばしいことです。

◇北海道　稲毛　三郎
◇青森県　山田　幹夫
◇宮城県　高橋とし子
◇秋田県　相馬　ツキ　小前　ミホ
小前　チク
◇福島県　冨田　ミツ　冨田　キミ
鈴木ヨシエ
◇茨城県　安藤　やす　安藤　啓次
豊谷美恵子　豊谷　秀光　小倉　洋子
◇栃木県　菊地　彦亘　猪瀬　ナカ
栗山　志ち　柳町　とり　神谷　和枝
◇埼玉県　秋本　英郎　秋本　清子
野田　雅子　小野　リエ　北原ひで子
近藤マスエ　千田　恒子　小林　孝
小林　節子　柴田　貞子　服部　陽一
藤田　清瀬　藤田　羊一　山下　みつ
小野塚君子　鯨井　久八　橋本　淑子
橋本　健司　井沢　なを
◇千葉県　石川　きみ　岩佐　とみ
加瀬　よし　川間　つね　田中　雄吉
谷澤　英子
宮本　豊吉
◇東京都　佐藤　宗丕
大石　潔　森田　穣二
白井まさ子　白井　正恵
白井　勝年　内海　静枝
加藤　照子　中田　テル
佐竹　テス　石谷　典夫
荒木　常子　昼間　楽平
水野　はな　水野　薫
山口　良二　高橋　鎮夫
押谷　義雄　江間正二郎
黒川　直吉　栗原　利雄
斉藤　幸江　斉藤　芙美
篠崎　英夫　神宮　佳子
瀧　知道　瀧　崇江
蓮尾　諭吉　間々田やす
田島知恵子　高橋かつ江
佃　喜美　出口　スエ
沼山　正英　橋口　昭利
星野　綾子　山森　久江
村上　芳江　柳沢　正雄
大阿久ノブ　西田　恒子
◇神奈川県　鈴木　孝輔
土屋　太郎　十二　徳次
栗田千代子　赤坂　スズ
内藤つる子　渡辺キヨ子
榎本　益明　片山　計
米倉　章　米倉　正江
川島美恵子　大石　岳男
大石　美奈　大石美代子
渡辺キヨ子　内田　美穂
芳賀タツエ
宮崎　邦子
佐藤　ナヲ
宮崎　彩子
吉田　久光
佐藤　ナヲ
小山キミ子
白井小夜子
内海　淑子
中田　わか
高林　芳夫
昼間志津子
鈴木喜久子
遠藤　安男
黒川　誠
小池　勇二
斉藤耕太郎
山口　裕子
菅沼　昇
田島　昭夫
湯山とし子
西沢　和子
長谷川智子
村上　義博
松尾　絢子
田中　猛
杉田　絹恵
田中　菊枝
岩田とし子
岡野　正文
吉田ミサヲ
徳田　叶子
大石美代子
西森サツキ
◇新潟県　斉田ヨシエ　坪井　繁男
米田　トシ　橋本　淑子　澁谷セキノ
◇富山県　村梶　光栄　池田　淑子
◇福井県　田賀　将一　田賀　英子
田賀　茜　牧野富美子
◇山梨県　望月とよ子
◇長野県　伊藤ますの　宮入　貞夫
宮尾　すい　神田　環　神田　聖子
神田　章　小林　重雄
◇岐阜県　渡辺　三三
◇静岡県　山田　登世　遠藤　清巳
服部くにゑ
◇愛知県　大森　すゞ
◇広島県　浦手　ハル　浦手　健司
奥井　礼子　植田　操　浦手　豊明
◇香川県　秋山百合子
◇長崎県　林　文枝　井上　義夫
◇熊本県　片山　康子　宮崎　邦子
宮崎　彩子
◇宮崎県　高橋　重美

▲住所、会員との関連等不明の方

佐藤　千代　大井誠之助　大井　和子
大野　清子　池田　直一
岡本　幸雄　岡本寿栄子

▲右の他に氏名のわからない方が八名おられました。

心行くまでゆっくりお参りさせて頂き、それに素晴しい旅行にも連れて行って頂きどんなにか充実した思いで帰って来ました事か。本当に有難うございました。熱海の梅林も一度は見たいと思って居りましたし、それに小田原での素晴しさ、数年前に鎌倉で一度だけ孫娘と一緒に懐石料理を楽しんだきりですので、本当に帰って来ましてもフワーッとした様な気分でございました。九段会館で御一緒して頂いた方々にも来年はきっと参加なさる様にこの度の旅行の楽しかった様子をお伝へしました。来年もよろしくお願い申し上げます。

埼玉県　小野　リエ

直会旅行、ほんとうにお世話様になりました。皆様のお元気なお姿に接しなつかしいお話が出来ました。

また来年まで健康に気をつけて等々楽しい一夜でした。翌日の昼の懐石料理楽しく戴きました。私などには中々戴けないお料理で、会長様役員様方のお骨折り感謝致しております。（あの会費で良いのかしらと一寸気にかかりました）

十国峠の写真、良い記念に成ります。尚スナップは来年と思っておりましたのに思いがけず早々とお送り下さいまして嬉しくなりました。関係幹事様有難うございました。

名簿訂正 (2)

◎ 昭和63年7月1日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏　名>	<訂　正　事　項>
35	蛭田タケ	死亡により，菅井光（同住所，続柄子）が継承
36	平形いせこ	住所を仙台市若林区新寺2—11—28と訂正
37	鈴木金松	死亡により，鈴木ユリ子（同住所，続柄姉）が継承
39	渡辺卯一	の次に新会員を追加
	鈴木ヨシエ	〒970 いわき市平才槌小路16 S301 ☎0246—22—2635 二女 鈴木久志 タラワ 3特根
	坂本キヨ子	970—02 いわき市平豊間字原町122 0246—38—2724 長女 坂本清六 ギルバート
39	豊谷美恵子	千葉県へ移転
41	森ゆきえ	の次に，新会員を追加
	三上英雄	〒371 前橋市元総社163 ☎0272—51—4158 弟 鎌滝 正 ウオッゼ 64警
43	原田千三郎	住所を宮代町東姫宮2—12—7と訂正
43	吉田よね	の次に次の新会員を追加
	石山昇	334 鳩ヶ谷市桜町2—2—24 ☎0482—85—9382 弟 石山甚之助 クェゼリン
45	津久井艶子	住所変更，279 浦安市日の出5—18棟803 ☎0473—50—1760
45	宮崎実	続柄，甥を加入
46	米田正子	の次に，茨城県より移転
	豊谷美恵子	〒285 佐倉市山王2—60—2 ☎0434—85—9333 妹 緒方 薫 クェゼリン 4施
47	江坂富子	神奈川県，江坂 弘と同居
49	田辺喜好	死亡により削除
50	土方フジ	戦歿者を，土方藤吾と訂正
51	柳沢正雄	住所・電話を，墨田区立川2—8—10 ☎03—631—2290 と変更
51	渡辺妙子	の次に，新会員を追加
	蓮尾諭吉	〒182 調布市調布ケ丘1—33—1 ☎0424—82—4470 兄 蓮尾隆市 ルオット
51	森田穣二	〒166 杉並区成田東4—3—27—1 ☎03—393—1878 甥 柴田桂太郎 クェゼリン 3137
53	落合てふ	死亡により削除
53	川名茂子	住所を，横須賀市不入斗4—45 と訂正
53	斉藤則男	住所変更，宿河原5—13—7
54	助川与富子	住所を250小田原市入生田前箱根母の星475長寿園D—502 ☎0465—24—0002と変更
55	吉田ミサオ	続柄を，妹に，戦没地をウオッゼと訂正
55	田中菊枝	の次に，新会員2名追加
	赤坂スズ	〒222 横浜市港北区鳥山町932 ☎045—471—6133 妻 赤坂好悦 ウオッゼ 531空
	江坂弘	〒230 横浜市鶴見区北寺尾3—10—13 ☎045—573—3788 長男 江坂弥 タラワ 3特根
55	阿部文吾	住所，下曲道を下曲通に，戦歿者を阿部勇三郎と訂正
57	三上幸雄	戦歿地を ウオッゼ 64警 と訂正
59	加藤敏男	住所，北巨摩郡を中巨摩郡と訂正
59	諏訪完三	死亡により削除
62	木野政雄	続柄，弟を加入
63	山田登世	の次に，新会員を追加
	増田将三	〒427 島田市旭町2—2—7 子 増田隆一 クェゼリン
64	大原儀一	住所を高針2—1806と訂正
64	吉田ひさ子	の次に，新会員を追加
	浜田芳枝	〒478 知多市梅ガ丘2—271 ☎0562—55—7172 長女 増田隆一 クェゼリン
65	正野きぬ	の次に，新会員を追加
	小寺洋子	〒522-02 犬上郡甲良町小川原770—60 ☎0749—25—2763 長女 小寺義之 タラワ
66	和田和子	の次に，長崎県より移転
	福田音和	〒569 高槻市深沢町1—7—2 大串方 ☎0726—71—5444 妻 福田近平 クェゼリン 61警
67	沢田寿子	住所を，上ケ原8—7—18—102 と変更
71	奥田マス	死亡により削除
71	奥田和広	住所を，観音寺市八幡町1—10—6 と変更
78	福田音和	大阪へ移転

79	南　ミツ	の次に，新会員を追加
	木村二三夫	〒879-22 北海部郡佐賀関町関1380—2　☎0975—75—0878　　弟　木村孝夫　クェゼリン　61警　弟　木村雪夫　クェゼリン　6通
82	宮城幸子	住所184を325と訂正
83	江村源次	住所，大井坪を子種　と訂正
84	豊谷秀光	住所，電話を，〒285 佐倉市山王2—60—2　☎0434—85—9333と変更
84	ナウル四高会	住所を，神田淡路町2—6　シャビロビル　と訂正
84	松岡　実	死亡により削除
84	蹴揚秀雄	の次に新会員を追加
	野村盛弘	〒671-22 姫路市書写台3—109　☎0792—66—2346
	押谷義雄	〒144 大田区蒲田4—9—8—301　☎03—733—7508　952空
85	石井　清	住所を，緑町3—36—10　に変更
85	西村祐造	局次長を課長と訂正・死亡により削除
85	＜篤志会員＞	87　＜本会役員＞の異動については本号2頁の記事を援用します。

寄付者芳名

（敬称略・順不同）

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

◇北海道
黒沢　克巳　堀口　三男　柴田　貞子　鯨井　久八　小林　ミツ
下里　梅子　菅井　せい

◇青森県
菅井　光　工藤　ハナ
本堂　テフ　田中　ロク　伝福　ちゑ
塚原　ハナ　山田　幹夫　池田　精治
◇岩手県
菅原　キイ　小杉　リサ
◇宮城県
松木　孝子　高橋とし子
平形いせこ
◇秋田県
加藤　カヨ　近藤キクエ
小室舜司郎　熊谷サタヨ　相馬　ツキ
奥山　キノ　小前　ミヤ
◇山形県
丹野　アサ　大場美津子
秋保　十郎
◇福島県
鈴木ヨシエ　冨田　ミツ
菊地　レイ
◇茨城県
倉橋　たみ　大熊　もと
豊谷美恵子　冨田　保　神谷　和枝
宮内　はつ　若狭　明光　安藤　啓次
◇栃木県
吉川　芳蔵　木村恒三郎
淀川　元弘　猪瀬　ナカ　田名網武夫
◇群馬県
森　ゆき江　日向野キク
◇埼玉県
小野　リエ　秋本　英郎
長谷部なお　小谷中せい　栗原　タネ
浅野　チカ　藤田　清瀬　北原ひで子
井沢　なを　吉田　よね　近藤マスエ
原田千三郎　宇田川ひさ　野田　雅子

◇千葉県
川間　つね　田中　雄吉
谷沢　英子　津久井艶子　祖田　弘光
吉田ヤヨイ　桜井　一正　芳賀タツエ
宮本　豊吉　石川　きみ　加瀬　よし
◇東京都
木村　常七　佐竹　エス
佐藤　宗丕　江間正二郎　六軒つる子
鈴木梅太郎　五十嵐孝三　小泉　文江
原　富子　菅谷喜代子　石谷　典夫
大嶋　か乃　栗原　利雄　小池　勇二
昼間　楽平　飯島　祐宣　荒木　常子
坂本美枝子　佃　喜美　斉藤耕太郎
中村　久　山口　裕子　飯島浩一老
番場　信子　関口仙之助　山森　久江
中田　テル　出口　スエ　水野　はな
小山キミ子　長谷川智子　沼山　正英
菅沼　昇　高橋　鎮夫　遠藤　安男
大石　潔　内海　静枝　西沢　和子
黒川　誠　高林　芳夫　間々田やす
◇神奈川県
沖立　キヨ　伊沢　ヤス
熊沢　静子　岩瀬　石松　鈴木　リン
川名　茂子　三村ともよ　吉水　梅子
岩田とし子　鈴木　孝輔　渋谷　良雄
石渡　綾子　佐藤　登志　西森サツキ
◇山梨県
中山　いよ　黒川　正文

望月とよ子
◇長野県
伊藤　正人　中村なつ江
田中　八郎　牛山　光子　勝野仁一郎
宮入　貞夫　神田　環　伊藤ますの
◇新潟県
青木　謹次　高林　セキ
坪井　繁男　高野　清　坂井　繁男
渋谷セキノ　佐藤　フジ　米田　トシ
片桐　さき　藤田　ヨリ　安部　文吾
小林　正道　山田　正三
◇富山県
村梶　光栄　中村　ちよ
藤木　ハナ　広島　富子　柴田外美子
棚橋　昭二　本多喜久江　池田　淑子
金山　深雪
◇石川県
吉光　澄子　佐々木久子
林　庄三　高畠　芙蓉
◇福井県
柳沢　清信　鳥羽　春枝
青木みねを　吉田　綾　鳥本みさを
◇岐阜県
渡辺　三三
◇静岡県
市川　市郎　曽根　エイ
大塚　かね　服部くにゑ　土屋まさ子
飯田たつ子　山田　登世　江藤ふみ子
松下　龍二
◇愛知県
川越　コウ　吉田ひさ子
川村　正一　大原　儀一　岡島みね子
山田　あき　大森　すず
◇三重県
伊藤　みね
◇京都府
谷　正文　八木　きよ
小林　サト　中川　修
村上　増枝　安井ふみ子
中根　杉子
◇大阪府
松宮　花子
中野フヂエ　馬場冨美子
◇兵庫県
清水つちゑ　柴崎　晃

山野イクヱ　安福道明　山本允子
◇和歌山県
福井栄子
◇鳥取県
杉川及江
◇島根県
園山和子
◇岡山県
金子ミサヲ　溝口ハナコ
◇広島県
松本タカミ　藤本正
小林アヤ子　浦手ハル
奥井礼子　浦手清司
◇山口県
嶋田チヨ
内宮ミツヨ
◇徳島県
坂本栞
◇香川県
松原ユキヱ
奥田和広
◇愛媛県
清水朝夫
山本峰子
森田静子
大塚喜久雄
◇高知県
河野里美
近森幸恵
◇福岡県
小林繁幹
吉松貞子
深川芙由
安部かつよ
近藤シヅヱ
◇佐賀県
犬山タツノ
◇長崎県
山下タヱ
◇熊本県
村上佳寿子　植川二男　寺本ミドリ
片山玲子
◇大分県
石塚文子
◇宮崎県
池田トミ　山口ミツ　友枝カオリ
森フサヱ　山口マサ子　高橋重美
◇鹿児島県
和田芳久　村上ノキ　浜崎武一
川畑ツルエ　染川トメヨ　中堂園シヅ
◇沖縄県
出花利文　森テル子
石原キク
◇会友篤志会員等
豊谷秀光　江村源次　篠崎英夫
鈴木寅雄　押谷義雄　土屋太郎
足立広信　十二徳次　高田源次郎
井上義夫　ナウル四高会
◇府県不明
岡本幸晴　岡本寿栄子
（以上は63年10月1日から本年、4月30日迄に寄付された三〇九名で、金額の合計は、一、四二三、五〇〇円であります。）

本部だより

○本会創立以来相談役として御指導頂いてまいりました朝香孚彦様（朝香宮孚彦王殿下）は御高齢の故を以て御令妹大給湛子様（朝香宮湛子女王殿下）と交替されました。

○本号に、慰霊祭に参列した方のお名前をのせましたが、事前の申込みも、会員としての登録も、出席票の記入もない方が七名ありました。

愛知県の岡本幸晴様、同寿栄子様は会費と寄付金をお納め下さいましたが当会の名簿にありませんので御存知の方は住所、電話をお知らせ下さい。

○今回は、大勢の会員から御寄稿やお便りを沢山頂きありがとうございました。紙面の都合で、のせられないものや、一部を割愛したものもありますが御寛容下さい。

連載の「激戦二十年後の戦跡（3）」と、本会会則全文は次号に掲載します。

○環礁第一号から第五十号までを、十号毎に合併本として希望者に頒布しております（第一集から第五集までの五冊）が、製本したものが少くなりましたので、今後は製本しない素材の状態でお届けすることもありますので予めお含みをき下さい。

代価は一冊一二五〇円・送料共です

○「25年のあゆみ・会員名簿」を昨年七月に作りました。本会創立以来の主な出来ごと、歴史の貴重な記録です。在庫の限りお頒けします。

代価は一冊一二〇〇円・送料共です

○本号の浜田さん、三上さん、坂本さん、加藤さん、鈴木さんのように、この会のあることを知らない方が沢山居ります。お知り合いに本会のことをPRして一人でも多くの会員を増やしましょう。マーシャル諸島とギルバート諸島また、その附近での戦没者の親族ならば誰でも入会できます。

夏の夜の光の祭典
靖国神社のみたままつり

恒例の靖国神社のみたままつりが次のとおり行われます。

△7月13日から7月16日の4日間
開門午前5時　閉門午後10時

△昇殿参拝希望者は4日間とも午前9時から午後8時まで参集所受付に

△4日間とも午後6時から祭典が行われます。参列希望者は5時40分までに参集所受付に。

△神賑行事　毎日午前11時から午後8時迄各種の催し物で賑やかです。

△本会は毎年「みたままつり」に協賛のため大型献灯一個を奉納し御霊をお慰めしております。

昭和天皇の御敬神を偲ぶ特別展

靖国神社遊就館で、標記特別展が開かれております。大層貴重なものばかりです。この機会に一度は拝観されますようおすすめいたします。

本部
〒103 東京都中央区日本橋人形町一―八―二（泉商事ビル）
マーシャル方面遺族会
電話 〇三―六六一―八七六〇番
FAX 〇三―六六一―六二四一